



双書 マルクス主義と統計

2

エンゲルスと統計

マールイー著 / 是永純弘 監訳

大月書店

双書 マルクス主義と統計 ②

エンゲルスと統計

マールイー著／是永純弘監訳

大月書店

訳者紹介

是永純弘	北海道大学経済学部教授
青柳和身	鹿児島経済大学経済学部講師
泉 弘志	大阪経済大学経済学部助教授
伊藤陽一	法政大学経済学部教授
桂 昭政	桃山学院大学経済学部助教授
中江幸雄	京都大学大学院
杉森混一	岡山大学人文学部助教授
長屋政勝	龍谷大学経済学部助教授

双書 マルクス主義と統計 2
エンゲルスと統計

1980年5月10日第1刷発行

¥ 1200

監訳者◎ 是 永 純 弘

発行者 平 智 享

〒113 東京都文京区本郷2-11-9

発行所 株式会社 大 月 書 店 印刷 太平印刷
製本 田中製本

電話 (営業)813-4651 (編集)814-2931 振替 東京 3-16387

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

凡 例

一 本書は、イ・ゲ・マールイー著『フリードリヒ・エンゲルスの諸著作における統計の諸問題』、「スタティステイカ」出版所モスクワ、一九七三年(М.Г. Малыш, Вопросы статистики в трудах Фридриха Энгельса, Издательство, Статистика, Москва, 1973.)の全訳である。

一 原文がイタリック体の箇所には、訳文では傍点を付し、ゴシック体の箇所は、訳文でもゴシック体にした。

一 原書の脚注は、訳文ではパラグラフごとに該当箇所に(1)、(2)……を付し、各パラグラフ末にその説明文をおいた。

一 訳者による簡単な補注は、本文該当箇所に「」に入れて示した。

一 著書、論文、雑誌、新聞名には『』を、引用文には「」を用いた。

一 マルクス、エンゲルス、レーニンの著作からの引用は、おおむね大月書店刊の『マルクス・エンゲルス全集』および『レーニン全集』によっている。引用箇所の表示にさいして、たんに『全集』と記してあるのは前者をさし、『レーニン全集』と記してあるのは後者のことである。

なお、原書で用いられているロシア語版『マルクス・エンゲルス全集』(第二版)と邦訳『マルクス・エンゲルス全集』とのあいだに明らかな相違がある場合(主として、編集上の相違やマルクスの原テキストの誤りの訂正、あるいはロシア語版の誤植と思われるような場合)は、邦訳『全集』の底本であるドイツ社刊のドイツ語版『全集』によって翻訳した。

一 文献注のうち、原書がロシア語文献のものはそのまま訳し、邦訳書がある場合はそれを付した。それ以外の文献については、邦訳書のあるものによって示し、ないものは原語で示した。

なお、引用文は、邦訳書のある場合でも、かならずしもそれに従っていない。

一 本書の原訳は、杉森晃一(はしがき、第一章一二)、長屋政勝(同三、四)、桂昭政(第二章一)、中江幸雄(同二)、泉弘志(同三)、青柳和身(同四)、伊藤陽一(第三章、むすび)が担当し、是永純弘が全体の校閲・統一をおこなった。

目次

凡例	1
はしがき	一
第一章 エンゲルスと統計理論の一般的諸問題	九
一 エンゲルスと統計の意義	九
二 エンゲルスと数学	三〇
三 大数法則にかんするエンゲルスの見解	三三
四 エンゲルスと平均値	三七
第二章 エンゲルスの諸著作における経済統計の諸問題	三九
一 人口統計の諸問題	三九
二 勤労者の生活水準統計の諸問題	四九
三 国富統計の諸問題。エンゲルスと資本の有機的構成の指標の算定	一〇九
四 エンゲルスの諸著作におけるロシア統計資料	一三三

IV

第三章 エンゲルスと政治統計および軍事統計の諸問題	一六
一 政治統計の諸問題	一六
二 エンゲルスと軍事統計の諸問題	一六
むすび	一六
監訳者あとがき	一六

はしがき

なんと理性の燈火が消えたことだろう、

なんと心臓が鼓動をやめたことだろう！

このネクラースの詩句は、レーニンが、一八九五年秋、エンゲルスの死の直後に、追悼論文『フリードリヒ・エンゲルス』の題銘として引用したものである。

この論文でレーニンは、エンゲルス自身が、マルクスなきあとの最も卓越した学者であり、プロレタリアートの教師であり、またその偉大な闘士であったと書いている。

エンゲルスの革命活動と科学活動は、その偉大なる友人マルクスの活動と不可分に結びついていた。彼らはともに革命的プロレタリアートの学説、つまりマルクス主義を創造し、ともにユートピア的空想を科学にかえて、労働者階級の自覚を發展させた。マルクスとエンゲルスは、その目的意識をもった全生活のなかで、最も積極的に革命運動に参加し、それを指導した。例えば、一八四八年革命のときそうであったし、マルクスによって創立された、国際労働者協会すなわち第一インタナショナルの活動においてもそうであった。第一インタナショナルの活動の終わった後は、彼らはともにさまざまな国の労働運動の指導にあたった（はじめの数年間には共同であったが、一八八三年マルクスが死んでからは、この仕事はすべてエンゲルスの双肩にかけられた。エンゲルスはその死（一八九五年）

にいたるまで、あらゆる国々の社会主義者たちの教師であり指導者であった。彼らは、レーニンの言によれば、「老エンゲルスの豊かな知識と経験の宝庫から汲みとつたのである」(1)。

(1) 『レーニン全集』第二巻、一一一ページ。

マルクスとエンゲルスは、社会科学上の大革命をなしとげ、プロレタリア革命の必然性、その目的・過程・方法および原動力の本質を科学的に基礎づけた最も偉大な学者であり、革命家でもあった。

エンゲルスは、——きわめて謙虚で、まれにみる高潔な人物である——自身をマルクスの後におき、マルクスのもとで自分は第二バイオリンを弾いていたと考えていた。一八九〇年、生誕七〇歳を祝う多くの手紙にこたえて、この尊敬の大部分は自分に帰せられるものではなく、自分は、自分よりもずっと偉大な人物——カール・マルクスの名声と榮譽とを、彼がまいた種子をただ収穫しているにすぎないことを誰よりもよく知っていると書いている。

レーニンは、エンゲルスの活動を評価して、エンゲルスのおこなった自己評価は、全体としては、まったくそのとおりだと書いている。と同時にレーニンは、プロレタリアートの革命的科学的創造におけるエンゲルスのすぐれた功績を何度となく指摘して、「近代社会主義の創始者としてマルクスとエンゲルスの名がならび称されている」(1)と書いている。だからこそ、レーニンは、「エンゲルスの全著作を考慮にいれずには、マルクス主義を理解することはできず、それを完全に叙述することもできない」(2)と指摘しているのである。

(1) 『レーニン全集』第一九巻、六〇六ページ。

(2) 『レーニン全集』第二巻、八〇ページ。

エンゲルスの科学的関心はきわめて多様であって、科学的知識のさまざまな分野でめざましい成果をあげている。エンゲルスの初期の経済学の著作『国民経済学大綱』(一八四三—四四年)を特徴づけて、マルクスはこれを「天

才的なもの」と書いている。エンゲルスは、イギリスの労働者階級の状態を深く探究して、一八四五年のはじめに、著書『イギリスにおける労働者階級の状態』においてこの研究の諸結果を一般化している。レーニンはエンゲルスのこの著書を、世界の社会主義文献のなかですぐれたもののひとつであると特徴づけている。この著書の著者としての若きエンゲルスの主要な功績は、プロレタリアートの窮状をあきらかにしただけではなく（このことならば彼以前にも多くの人がやっている）、プロレタリアートが苦しんでいる階級であるのみならず、その客観的な立場からして、社会主義をその政治闘争の目的として、自らを救済する戦闘的な革命的階級であることをはじめて述べた点にある。

マルクス・エンゲルスは『共産党宣言』を書いたが、これについてレーニンは、この小冊子がまとまった教巻の著書に匹敵するものであって、その精神は組織された闘うプロレタリアート全体が生きがいにしていと述べている。マルクスとエンゲルスが『共産党宣言』において提起した戦闘的なスローガン「万国の労働者、団結せよ」は、今日でも、世界のプロレタリアートの呼びかけの声になっている。

『資本論』の創造にエンゲルスの果たした役割は偉大である。レーニンの指摘しているように、マルクスの死後エンゲルスは、マルクスが完成しえなかつた『資本論』第二、第三部の仕上げと出版に大変な労苦を払った。レーニンは「事実、『資本論』のこの二つの巻は、マルクスとエンゲルスとのふたりの労作である」と書いている（1）。レーニンはこの概説を書いた当時、マルクスとエンゲルスの往復書簡は公刊されておらず、したがってレーニンはそれを知らなかつたが、この往復書簡によつて、エンゲルスが『資本論』第一部の創作についてもきわめて重要な役割を果たしたことが明らかになった。エンゲルスは一連の理論的諸問題についてつねにマルクスの助言者であり、重要な経済学的計算についての相談相手であつたのである（2）。

(1) 『レーニン全集』第二巻、一〇ページ。

(2) とくに注目されることであるが、マルクスとエンゲルスの往復書簡が発表されたあとすぐに、レーニンは、この往復書簡についての論文を書きはじめた。この論文は未完成のまま、エンゲルス生誕一〇〇年の日、一九二〇年一月二八日付の『プラウダ』に掲載された。ここでレーニンは、『マルクスとエンゲルスの往復書簡』という表題に、「共産主義の創始者の一人としてのエンゲルス」という副題をそえている(『レーニン全集』第一九巻、六六七ページ参照)。

『反デュリング論』もエンゲルスの筆になる。レーニンの言によれば、この著作では、「哲学、自然科学、社会科学の分野における最も重要な諸問題」が解明されている。レーニンは、「これは、おどろくべく内容の豊かな、おしえるところの多い書物である」と書いている(1)。エンゲルスは、哲学の専門著作『ルートヴィヒ・フォイエールバッハとドイツ古典哲学の終結』および、未完ではあるが重要な労作『自然の弁証法』の著者である。エンゲルスは、偉大な社会学的研究『家族、私有財産および国家の起源』を書き、歴史の分野(例えば、その著作『ドイツの農民戦争』、言語学の分野(例えば、著作『フランケン方言』)において、いくつかの問題を解明した。

(1) 『レーニン全集』第二巻、九一〇ページ。

周知のように、エンゲルスは、一八四八―四九年の革命の時には自ら軍事活動に参加しただけでなく、軍事問題の研究にも多くたずさわって成果をあげており、軍事問題通となったため、仲間の友人たちからはしばしば「將軍」と呼ばれていた。軍事問題についての多数の労作がエンゲルスによって書かれている。レーニンは、エンゲルスから学んだ社会主義者は、誰ひとり、革命の達成とその成果の防衛にかんして、軍事知識が巨大な意義をもっていること、軍事技術と軍事組織が巨大な意義をもつことをうたがうことはできない、と述べている(1)。エンゲルスとレーニンが明らかにしたこの命題は、きわめて現実的であることに注意しよう。

(1) 『レーニン全集』第八卷、五七三ページ。

レーニンは、エンゲルスの特別な功績として、日和見主義者との彼の断固たる闘争をあげている。レーニンは、次のように書いている。エンゲルスは一八八二年、つまり修正主義者E・ベルンシュタインの悪名高い著書が出るだいぶまえにはやくも、修正主義の出現を予言し、「このとき以来、ことにマルクスの死後には、エンゲルスは、——倦むことなく、と誇張なしに言うことができるが——ドイツの日和見主義者たちがまげた『棒をたわめなおした』のである」と。レーニンは書いている。エンゲルスが、「ブルジョアの的な労働者党とは何か」を深く追究し、明確に指摘し、修正主義がブルジョア層による「労働貴族」の買収——独占によってあがった超過利潤によっておこなわれた買収——と結びついていることを示して、この現象をみごとに分析していると(2)。ブルジョアの、また修正主義的なイデオロギーとの闘争において妥協しないことは、マルクス、エンゲルスおよびレーニンというわれわれのすぐれた指導者たちがのこしてくれた重要な遺訓のひとつである。

(1) 『レーニン全集』第一二卷、三六九ページ。

(2) 『レーニン全集』第三卷、一一七ページ。

レーニンは、唯物論と弁証法にたいする、エンゲルスの忠実さを、マルクス主義的世界観のこれらの基礎を發展させ擁護するうえで彼の戦闘的な精神をとくに強調している。レーニンは、「弁証法家エンゲルスは、晩年に行きたるまで弁証法に忠実であつた」と書いている。レーニンの指摘しているように、エンゲルスは、物質と、思考におけるその反映にかんして、つまり、この思考の上の反映は感覚のみに由来するということにかんして、マルクス主義哲学の基本的見地を、つねに、例外なく、進展させた。エンゲルスの大作『自然の弁証法』が公刊されるだいぶまえに、レーニンは、すでに公刊されていたエンゲルスの諸著作、とくに『反デューリング論』に依拠して次

のように述べている。すなわち、『反デューリング論』の最後の序文が書かれた一八九四年にいたるまで、エンゲルスは、新しい哲学と新しい自然科学との動きを見まもりながら、彼の明瞭な、確固たる立場をこれまでの断固たる態度で主張しつづけ、「新しい体系や小体系のこみを掃きすてた」⁽²⁾。エンゲルスの哲学的見地にたいするこの評価は、レーニンが、彼と同時代の哲学と自然科学の発展を分析することによって、当時の自然科学の最も重要な契機を一般化し、今から何十年もまえに、まえもって、科学的な哲学の発展の前途を示した、その天才的労作『唯物論と経験批判論』でも保持されている。

(1) 『レーニン全集』第二五卷、四九一ページ参照。

(2) 『レーニン全集』第一四卷、四〇九ページ。

十月革命のあとに出されたエンゲルスにかんするレーニンの見解は、とくに興味ぶかくまた意義あるものである。『共産主義における「左翼主義」小児病』という書物でレーニンは、エンゲルスはマルクスと同じく、「書いた個々の章句が、驚くほど深い内容」をもって、最も稀な著述家のひとりであると書いている⁽¹⁾。有名な講演『国家について』のなかで、レーニンは、エンゲルスの労作『家族、私有財産および国家の起源』を、「現代社会主義の基本的著作のひとつであり、その一句一句があてずっぽうに言われたものではなく、膨大な歴史的材料と政治的材料にもとづいて書かれているという信頼をもってのぞむことのできる著作である」⁽²⁾と特徴づけている。

(1) 『レーニン全集』第三一巻、五三三ページ参照。

(2) 『レーニン全集』第二九巻、四八〇ページ。

一九一八年の論文『予言』では、レーニンは、実現した科学的予言のひとつについて書いている。それは、エンゲルスがすでに一八八七年に述べた、将来の世界戦争とその諸結果という科学的予言のことである。レーニンはこ

ここで、当時エンゲルスがおこなった正確、明瞭、簡潔で、科学的な階級的分析の一句一句の思考が限りなく豊かなものであると指摘して、この予言を天才的な予言であるとしている。いうまでもなく、エンゲルスが当時予言したことはいくつかは、実際にはそのとおりにならなかったが、これはけっして不思議なことではない。なぜなら、その後三〇年のあいだに、異常に急激な帝国主義の発展が資本主義世界をはなだしく変化させたからである。レーニンは書いてある。「だが、なによりも驚くべきことは、エンゲルスの予言のこうも多くの部分が『本』に書いてあるとおりに』実現したことである。というのは、エンゲルスは非のうちどころがないほど正確な階級的分析を与えたのであるが、諸階級とその相互関係は、いまでも以前と変りないからである」(1)。

(1) 『レーニン全集』第二七巻、五〇九—五一〇ページ。

エンゲルスの革命的な科学的方法とレーニンによるその高い評価は、今日でもその意義のすべてを保持している。なぜなら、資本主義の世界は、いかに変化しようとも、ブルジョアのイデオロギーおよび修正主義的イデオロギーたちがいいたてるあらゆることは正反対に、やはり資本主義の世界にはちがいないのであって、この世界における基本的諸階級とその相互連関は、マルクス、エンゲルスおよびレーニンの明らかにした諸法則に従っているからである。

以上のすべては、エンゲルスが、プロレタリアートの革命的学説の偉大な創始者のひとりであり、最大の指導者、天才的思想家であり、偉大な博学者であることを示している。

エンゲルスの科学的で革命的な活動のそもそものはじめから、その百科全書家的な関心のうちには統計学が含まれていたのであるが、エンゲルスは統計材料をよく知っており、自らの科学的諸研究と革命的マルクス主義の偉大な学説の普及にこれを広く利用した。このさい、エンゲルスは多くの最も重要な統計の諸問題を提起し、それらを

研究して、統計学の理論と方法の分野で、一連の重要な命題をうちだしている。本書は、統計学の理論的基礎を確立するうえでエンゲルスの貢献をとりあげようとするものである。

第一章 エンゲルスと統計理論の一般的諸問題

一 エンゲルスと統計の意義

科学的な研究において依拠することのできるような土台は、正確で疑問の余地のない事実から、何よりもまず統計的事実から、作らねばならないというレーニンの命題は、よく知られている(1)。エンゲルスは、自らの諸著作によって、こうした土台を創出した、マルクス・レーニン主義の古典家の最初の人である。これは、一八四四年の終りから一八四五年のはじめにかけて書きあげられ、四五年に出版されたエンゲルスのすぐれた作品『イギリスにおける労働者階級の状態』をさしているのである。

(1) 『レーニン全集』第三卷、三〇一—三〇二ページ参照。

それから約三〇年後、前世紀の七〇年代はじめに、著作『住宅問題』のなかで、エンゲルスは、『イギリスにおける労働者階級の状態』において「近代的大工業によってつくりだされた社会状態を記述することによって、当時成立の途上にあつて空文句を事としていたドイツ社会主義に事実に基礎を与える」(2)ことを自らの課題としたと

書いています。

(一) 『マルクス・エンゲルス全集』 第二版(ロシア語)、第一八巻、二八一ページ〔邦訳『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店刊)、第一八巻、二八三ページ。以下、原書では、このロシア語版第二版からの引用は、巻数とページ数の略記により表示されているが、本訳書では、邦訳版のみで表示する。例えば、『全集』第一八巻、二八三ページ〕。

エンゲルスのこの著作の副題は、「著者自身の観察および確実な文献による」となっている。一八四四年一月、エンゲルスはマルクスあての手紙で、「僕は耳のうえまでイギリスの新聞や本のなかに埋まっている。これらのものによつて、イギリスのプロレタリアの状況にかんする僕の著書をまとめるわけです」と伝えている(『全集』第二七巻、一〇一―一ページ)。その著作の序文で、エンゲルスは次のように書いている。「私が見たり、聞いたり、読んだりしたことは、本書のなかにとりいれられている。……私は、一瞬のためらいもなく、イギリス・ブルジョアジーにたいしてこう挑戦する。全体の立場にとつて、なにか重要性をもつただひとつの事実についても、誤りがあるなら指摘せよ——私が引用したのと同じように確実な典拠をあげて指摘せよ、と」(『全集』第二巻、二二八ページ)。

エンゲルスが典拠というのは、何よりもまず、一連の「青書」——イギリス議会が出している公式の出版物で、広範な統計材料を含んでいる——からとりだされた統計資料のことである。これらの「青書」は、内務省の棚に死蔵され、議員たちが、どれくらいの厚さまで撃ち抜けるかをきそり、ピストル射撃の練習の標的になっていたものである。そして、エンゲルスがはじめて、後にはマルクスが、これらのうちに収録されていた統計材料を、ブルジョアジーにたいする真正銘の起訴状を作成するために用いたのであり、ブルジョアジーを、エンゲルスがその著書で書いた表現を借りれば、社会的殺人の罪で告発したのであった(『全集』第二巻、三四〇ページ参照)。

エンゲルスは、最初の文献注で次のように書いている。「ポーター著の書物『国民の進歩』、ロンドン、一八三六年、第一巻、一八三八年、第二巻、一八四三年、第三巻（公式の資料にもとづいている）その他の大部分は同じく公式の資料による」（『全集』第二巻二三七ページ）。「ごらんのように、イギリスのブルジョア経済学者であり統計家でもあったG・ポーターの研究の第三巻目は、エンゲルスが自分の研究の執筆を開始した年の前年に出版されたものである。だからエンゲルスは、一八九二年に出たドイツ語版でまったく正当にも追加して、ポーターの与える工業上の変革についての歴史的概説はいくつかの細かい点で不正確であるが、「一八四三—一八四四年には、これ以上のいい資料はなかった」と書いているのである¹⁾。エンゲルスは、以下でみられるように、その後も最新の統計材料を利用したのであるが、ここではしばらく、著書『イギリスにおける労働者階級の状態』の統計的基礎という問題にたしかえることにしよう。

(1) これより以前の論文『イギリスの状態、一八世紀』（一八四四年二月）でも、エンゲルスはポーターの著書を引用している。エンゲルスは、この論文で使っている資料は、大部分はポーターの著書からとったものであり、そしてポーターはウィング党内閣のもとでの商務省の一官吏であったから、この資料は公式の典拠からひいてきたことになると指摘している（『全集』第一巻、六二〇ページ参照）。この論文でエンゲルスは、統計資料から基礎を創造するはじめての試みをおこなって、完全な統計指標の体系を發展させた。エンゲルスの著作を、統計材料について特徴づけるならば、彼ができるだけ「手術して」統計資料を更新しようとする努力していたことを指摘すべきであろう。例えば、『イギリスにおける労働者階級の状態』では、論文『イギリスの状態、一八世紀』にくらべて、原綿の輸入量とか、イギリスの港に就航している汽船の数とかいった一連の資料が——これらの著作がほとんど相ついで書かれたにもかかわらず——更新されているのである（『全集』第一巻、六二五、六二〇ページと、『全集』第二巻、二二六、二四三ページを参照せよ）。

エンゲルスのこの著作は、なによりもまず次の二つの重要な公式資料に依っている。第一のそれは、一八三三年